

## 撮影監督、芦澤明子に聴く

この度は、映画などの撮影監督として活躍の芦澤 明子（あしざわ あきこ）さんに、2016年12月に公開の映画『オケ老人』を通して、撮影に対する心構え、指針などお話を伺った。

作品のねらいによって、デジタル、フィルム、デジタルとフィルムとのミックス使用等提案するようにしている。

撮影監督を担当した映画「オケ老人」<sup>1)</sup>では、フジノンレンズZKシリーズを使う。

フジノンレンズZKシリーズは何といっても軽量なことが利点だ。発売当初から使っている。徐々に改良が加えられ、使い易いレンズである。「オケ老人」は、ドラマであるがドキュメンタリータッチがねらいなので2台のカメラでどンドン撮って行った。

使用したレンズはZK4.7×90（焦点距離19～90mm）をメインに2台のカメラで2本、ZK3.5×85（焦点距離85～300mm）、ZK2.5×14（焦点距離14～35mm）をそれぞれ使った。

これらのレンズは、3本とも色ズレがなく、グレーディングの際に作業がしやすく楽である。ズームレンズではあるがボケ足が非常に綺麗に表現でき、この3種類のレンズだけで単焦点レンズの必要なかった。

プロフィール：芦澤明子（あしざわ あきこ）  
撮影監督、カメラウーマン。東京都出身。

青山学院大学時代にジャン＝リュック・ゴダールの『気狂いピエロ』を見て映画に目覚める。自主制作映画、ピンク映画の撮影を経て、テレビのコマーシャルフィルムの制作に携った。『LOFT ロフト』『叫』『トウキョウソナタ』など、映画監督の黒沢清などとよく組む。日本映画撮影監督協会（J.S.C.）所属。2016年、芸術選奨文部科学大臣賞（映画部門）、第40回山路ふみ子映画功労賞を受賞。

## 近年の主な撮影作品

南極料理人（2009）／わが母の記（2012）／  
はいかじ南海作戦（2012）／絶叫学級（2013）  
／受難（2013）／滝を見に行く（2014）／さ  
ようなら（2015）／岸辺の旅（2015）／シエ  
ル・コレクター（2016）／モヒカン故郷に帰  
る（2016）／オケ老人！（2016）／クリーピー  
偽りの隣人（2016）

## テレビドラマ

贖罪（2012年1月8日～2月5日、  
WOWOW）  
氷の轍：ABC創立65周年記念スペシャルド  
ラマ（2016年11月5日）

舞台は栃木県、足利市でオールロケで撮影された。

引きの映像や、寄りの映像など様々な場面があるが、遠くからズームで寄った場面でも、ワイドで撮った画面でも、画質が安定している。ズームレンズで寄った時にありがちなフレア感がなくてよい。ZKシリーズの長所のひとつは、光量が足りない時や、強い逆光の中等、苛酷な撮影条件の中でも、常にニュートラルな方向へむかってくれる事、くせがない事だ。だからグレーディング時も非常に助かる。

最近では、シネスコサイズの仕事が多い。上下切りの方式より、アナモレンズを使用している。アナモレンズの何とも言えないパース感やフレアの感じが良いと思うからだ。フィルム全盛期に「ちょっと甘い、柔らかすぎる」と敬遠され気味だったアナモレンズがデジタル撮影にはぴったりだ。実に軟調のよい感じが出る。願わくば、この様な軟調で少しパースのついたアナモレンズがもっと出てきてほしいものだ。

こだわっている事の一つは、「デジタルだからできる表現」を追求したいと思うことだ。時折「フィルムライクに」撮ってほしいと言われる事もある。これまでのデジタルシネマの発展の経過を考えれば、わかる気もするが「それならフィルムで撮ろうよ。そういう努力を少しでもしようよ。」と思ってしまう。

もう一つ「デジタル現象」という言葉にも少し抵抗を感じる。「ケミカル」を介さない「現象」ではないんじゃないかと。デジタル変換ではだめなのかなと。

「氷の轍」<sup>2)</sup>は、雪の北海道の話だ。カメラの感度をISO 3200に上げて撮影した。ハイライトが抑えられて、雪のよい感じが出せた。私はこの感度が大好きで、映画にも多用している。また、回想シーンにはフィルムを使用し、その部分は異彩を放って好評だった。

映画・テレビにかかわらず、4K作品が増えているが、高画質が似合う作品とそうでない作品があると思う。私は、大半の作品は2Kで十分だと思っている。しかしサツ



お話を伺った芦澤明子氏

カーの試合は4Kで細部までもっと観たいし、美術番組が8Kだったら、どんな風に観えるのかしらと想像をめぐらしたりしている。

すこし前、ソニーハンディーカムコーダー「Z7J」を使ってHDVで映画を撮った。「ヤマト・カルフォルニア」という作品だ。仕上げ作業をきちんとすれば、色の濁り具合や欠点とされていたところが、とても新鮮に感じられ、その作品には、ピッタリとはまった。作品一つひとつの美を見つけて、その方法論を提案していく事が、カメラマンの大きな仕事だと思う。4K・8Kが似合う作品もあれば、16ミリが似合う作品もある。大切なのは、多様な表現の泉を枯らさない様にする事だ。そのため私は少しフィルムにエコヒキしているのだが、若い方々にとってもフィルムを学ぶことは、広大な「デジタルの海」を泳ぐ上でも、きっと役立つことだと思う。もう一つ、やはり映画はスクリーンで観てほしい。大画面で観るといふような発見もあり映画がもっと楽しく観えるはずだ。スクリーンで観てこそ映画なのである。

本日はお忙しい中お時間をいただき、ありがとうございました。（編集部）

1) 監督：細川徹 / 原作：荒木源「オケ老人！」

撮影：芦澤明子

原作者：荒木源の同名小説を杏主演で映画化したハートウォーミング音楽コメディ。ひよんな勤達いから老人ばかりのアマチュア・オーケストラに入団してしまったヒロインが、個性あふれる老人たちに振り回されながらも、切磋琢磨していく中で成長していくさまを描く。共演に坂口健太郎、光石研。またアマチュア楽団員には笹野高史、左とん平、小松政夫らベテラン俳優陣が顔を揃える。

WEB：http://oke-rojin.com/

2) ABC創立65周年記念スペシャルドラマ

氷の轍

監督：瀧本智行 / 原作：桜木紫乃「氷の轍」（小学館）

撮影：芦澤明子

http://www.asahi.co.jp/koorinowadachi/movie.html#making